

札幌大学総合研究 第4号 (2013年3月)

〈書評〉

張偉雄著『比較文学考』 (白帝社, 2012年2月刊, 179頁)

高瀬 奈津子

比較文学文化研究では、研究方法として影響研究、対比研究など多岐にわたって行われてきたが、近年では異文化理解や翻訳研究などの研究もさかんとなっている。本書は、その異文化理解と翻訳研究という比較的新しい研究方法を用いた論考をまとめたものである。

本書のはしがきによると、異文化理解とは何かを考えるには、「異文化をまたがって生きた人物」に焦点を当てることが有効な分析方法であり、その人物が残した異文化体験を通じて、再構築された文化や異文化理解のあり方を解明できるのだという。本書の第一部では、清末の外交官の黄遵憲と日本人画家の牧野義雄、知識人として民国期の楊昌済と明治期の宮島誠一郎を取り上げ、彼らの異文化論に焦点を当て、異文化理解や共生について探求している。続く第二部では、イギリスの東洋学者、翻訳家のArthur Waleyを中心に、翻訳における「変容」の実態及び原因を分析している。Arthur Waleyの翻訳では、彼自身による作品の再創作が行われ、そのために多くの「変容」が生じ、異文化に対する一種の「曲解」も見られる。著者は翻訳の「変容」や「曲解」を分析することで、文化交流の複雑性、多様性を提示することに成功している。

では、各章の内容を簡単に紹介しながら、評者の感じた点などを述べていきたい。

まず、本書の構成を示すと以下の通りである。

はしがき

一、異文化理解

第一章 黄遵憲の日本理解

第二章 文化の狭間とロンドンの憂鬱

第三章 牧野義雄の異文化体験

- 第四章 楊昌済における異文化受容
- 第五章 文酒唯須らく旧好修むるべし
- 第六章 明治初年日中文人の交わした修身論

二、翻訳の変容

- 第七章 アーサー・ウェイリーの白居易「訳」
- 第八章 Brightonから「卜来敦」へ
- 第九章 「谷行」と「黄鳥」訳文の変容
- 第十章 Menfredから「曼弗列度」へ
- 第十一章 『自助論』の中国での伝播
- 第十二章 虚辞助語通じ難し

参考文献

あとがき

索引

第一章「黄遵憲の日本理解」では、初代の駐日公使の何如璋と共に日本に赴任した書記官の黄遵憲が、石川鴻斎や大河内輝声、宮島誠一郎ら漢学者との交流を通じて、明治期の西洋化に走る日本の社会や文化だけでなく、伝統的な日本文化にも接近できたことで、日本文化や風俗習慣を高く評価し、バランスの良い日本文化論を形成することができたとする。こうした黄遵憲の日本賛美の目的は自国に改革を促すことにあり、彼の日本研究は自国の問題解決の方法を見つけるための行為であったとする。このような異文化研究こそが黄遵憲の日本研究の特色であり、清末の維新運動に多大な影響を与えたと述べる。ところが、第二章「文化の狭間とロンドンの憂鬱」では、一転してアメリカとイギリス時代の黄遵憲の作品には不満、反撥、孤独、憂鬱などの感情を吐露したものが多かった。このような日本滞在時とは正反対の黄遵憲の異文化体験の背景について、おもに政治的原因と文化的原因から考察した結果、文化的な面に起因することを明らかにした。黄遵憲は自文化の良さを示すことができないどころか、自身の存在さえ無視され、一方的に相手に振り回され、しかも相手方の圧倒的な力の差を受け入れざるを得ないという状況下に置かれたのであり、これが黄遵憲を憂鬱に追いやったという。このような黄遵憲の「憂鬱」は、文化の相違を乗り越えることの難しさという、異文化理解のもう一つの側面を示している。一方、積極的に文化的相違を乗り越え、異文化共生を果たしたのが、日本人画家の牧野義雄であった。第三章「牧野義雄の異文化体験」では、牧野に焦点を当て、異文化理解、共生のメカニズムを探求する。1869年に愛知県に生まれた牧野は、1887年から1892年まで名

古屋英和学校で英語とキリスト教を学んだが、その入学前に彼は早くから漢学教育を受けたことにより、東洋文化についての「知」が形成されており、この東洋的な「知」が後に西洋文化を論じる時の「座標」として使えることができ、常に比較という手法で適格に問題の核心をとらえることができたという。1893年に牧野はアメリカに渡り、1897年にロンドンに渡ると、貧困などに悩まされながらも数多くの良識的な異文化論を発表したが、牧野の異文化論から筆者は、彼の異文化理解の態度について、「彼はある対象を称える時に、絶対視はせずに、文化を相対的に論じることに心がけている。自分の文化の良さを堪能すると同時に、他の文化をも評価できるセンスをもっている」と述べる。この文化を相対的に論じることができる牧野のセンスは、自分の殻に閉じこもらず、逆に積極的に異文化の側に出ていくことで、異文化の豊かさを発見した過程で得られたものだとする。そして、このような態度こそが黄遵憲や夏目漱石との違いであると指摘し、牧野を「異文化との共生を可能にした人物」と高く評価する。次の第四章「楊昌済における異文化受容」では、毛沢東に大きな影響を与えた湖南第一師範学校の教師だった楊昌済を取り上げる。楊昌済は、約10年に及ぶ長い海外留学生活を送るが、その中でも6年間にわたる日本留学は、彼の思想形成に大きな影響を与えた。帰国後も日本に対して強い関心を持ち続けたが、それは単なる個人的な日本趣味ではなく、「危機に直面している母国の問題を考えるとき、異文化から問題解決に有効な方法を探るために、彼は異文化に目を向け、日本に関心を寄せた」という。教育を通じて自国の近代化を目指していた楊昌済は、まず現実の生活習慣に存在する問題について、日本をはじめとする異文化の有効性を紹介することで、社会の改良に貢献しようとしたという。その一方で、楊昌済は異文化の導入にあたっては、文化の多様性という観点から、互いに長所を取って短所を補うべきだという考えを持っていたとし、このような伝統文化に対する楊の考えや態度の分析から、彼の異文化受容の心得、異文化受容の姿勢が、今日においてもきわめて示唆に富んでいると指摘する。続く第五章と第六章は先述した黄遵憲と交流した漢学者の宮島誠一郎を取り上げる。第五章「文酒唯須らく旧好修むるべし」では、宮島誠一郎と黄遵憲ら公使館との間の膨大な筆談原稿から、宮島と清国公使との初対面の時の筆談と旧正月辺りに公使館員と交わした詩の唱和の筆談を取り上げ、両者の交流の一端を考察している。第六章「明治初年日中国人の交わした修身論」では、宮島と黄遵憲との間で交わした修身や教育に関する筆談を取り上げる。この二つの章で筆者は、宮島、何如璋と黄遵憲の三人とも共通して文化を相対的に見ていることを指摘する。三人が交流したのは西洋化に走る明治期の日本においてだが、特に伝統文化に対しては、三人ともその成立の必然性及び社会的効果があるはずであり、近視眼的、功利主義的に扱うのではなく、特に教育の現場においては、伝統文化を十

分に生かすべきだと考えていたとする。

後半の「二、翻訳の変容」では、第七章から第九章までがイギリスの東洋学者Arthur Waleyの翻訳作品を分析対象とする。まず、第七章「アーサー・ウェイリーの白居易『訳』」では、Arthur Waleyの代表的な業績の一つである白居易についての翻訳や研究の軌跡を概観しながら、Waleyの研究手法や翻訳論について言及する。本章の中で筆者が後半で特に強調するのが、Waleyの翻訳論である。すなわち、彼の翻訳論である「文学作者は彼らの感情、喜怒哀楽というものを作品に注いでいるので、訳者がそれを感じとれなくて、単に乾燥無味に辞書に載っている言葉を羅列するに止まったら、まったく原作を代役する資格がない！」との言葉に対して、筆者は「非常に頼もしいものを感じる」とし、Arthur Waleyの一連の翻訳研究業績にはこうした認識を自らの翻訳作業のモットーにしていると指摘する。こうしたWaleyの翻訳態度に対して筆者は、「アーサー・ウェーリーはいつも努めて相手の「感じ方」、相手の「目」にアプローチして資料を解説していた」と評価する。次の第八章「Brightonから『卜来敦』へ」では、1877年にイギリスのリゾート地のブライトンを訪れた中国人外交官黎庶昌が描いた『卜来敦記』と、Arthur Waleyが20世紀の英国人に向けてA Chinaman's Description of Brighton in 1877 とし、『卜来敦記』をPU-LAI-TUN と題して訳したものとを取り上げ、両者を比べながら、Waleyの翻訳の問題点を具体的に分析している。はじめに筆者は、Waleyの訳文を「黎庶昌の原文の真意を英国人の立場で別の側面から浮き彫りにした」と述べているが、以後の分析を見ていくと、その「別の側面」とは、Waleyが黎庶昌の文学的な表現や言葉の理解が出来ていないことにより、不正確な訳語を選んだり、訳出していなかったりすることによるものであることが分かる。この点について筆者は最後に、「これは、まさに文化の翻訳とはどの程度可能であるのか、という普遍性のある課題を投げかけてくれた印」として、翻訳の問題点、限界を示す材料としている。さらに、文末で筆者は、Waleyの訳文の「創造的な側面」を最後に記しているが、残念ながら本文では指摘にとどまっており、考察にまでは及んでいない。これは、訳者が異文化を読者にどのように見せようとしているのかという、文化翻訳のもつもう一つの異文化理解の課題であると思われるので、もう少し言及が欲しいところである。続いての第九章「『谷行』と『黄鳥』訳文の変容」では、第七章でも触れたWaleyの翻訳論を念頭に、彼が英訳した日本の能楽The No-Plays of Japan と中国の『詩経』The Book of Song からそれぞれ「谷行」と「黄鳥」を取り上げ、彼が翻訳を通じて、この2作品を如何に理解していたのかを考察する。まず、「谷行」では、人間の「死」が作品の大きなテーマとなっており、Waleyも翻訳に際しては、彼自身の価値観を投影して、随所に新たな解釈を加えていたが、ここでは、はじめに先達

が登場して自己紹介する場面で、この「先達」をWaleyは単に“Teacher”と訳してしまったことにより、このセリフでの宗教的な意味合いが消えてしまい、その結果、後に続く翻訳も原文にある修行僧や弟子などの言葉が正確に反映されなくなり、この話の宗教的な神聖行事の姿が消えて、一種の冒険旅行の悲劇に格下げになってしまったと批判する。このような変容が起こった背景として筆者は、Waleyがこの「谷行」を「残酷な宗教的な強要」と解釈してしまったことを挙げる。それゆえに、Waleyは「谷行」を最後まで訳すことができなくなり、現代西洋人の趣味に合うような、Waley作の“TANIKO”へと変容させられてしまったとする。同じく「死」をテーマとする『詩経』の「黄鳥」も、原文の「誰従穆公」を、Waleyは“Who went with Duke Mu to the grave”と訳し、原文にない“to the grave”が加えられることで分かりやすくなった分、現代的な価値観に基づく、単なる残酷な非人道的な話へと決めつけてしまっており、当時の社会の価値観に対する認識が失われたとする。以上の両作品の翻訳の考察から、Waleyの、「古典の原文を、それを利用しようとする人々の持つ現代的な意義を与えて訳す」という翻訳手法を明らかにした。第十章「Menfredから「曼弗列度」へ」では、英国の詩人バイロンの詩劇「マンフレット」の一節を、森鷗外ら新声社は音韻や平仄などを用いて漢詩に訳したかを分析したうえで、彼らが本来意図していた「再現」が、「再創作」という形になったとする。第十一章「『自助論』の中国での伝播」は、サミュエル・スマイルズのSelf-Helpの日本語訳『西国立志編』の中国における伝搬を通じて、西洋の書物が翻訳され日本を通じて如何に中国に入り、影響を広げていったのかを、康有為と楊昌済という二人の人物から考察する。第十二章「虚辞助語通じ難し」は、黄遵憲の日本語論を取り上げたものである。

以上、本書の概要について紹介してきた。最後に、本書の所感などを述べて書評の責を塞ぎたい。本書の評価できる点として最初に上げられるのが、中国人、日本人、イギリス人が書いた文化論や翻訳を、それぞれの著作者の政治的・文化的背景や、その人物の視点、さらには彼らが書いた文献の想定される読者層に対してまで考察し、彼らが異文化どのようにとらえているのかを丁寧に取り上げていることである。往々にして、単に二つの文化を比べて、その違いを指摘するのが比較文化研究だと思われがちだが、本書を読めば、比較文化研究とはそうではないことが明らかである。第一部の異文化理解では、著者は、黄遵憲や牧野義雄等が異文化を如何にとらえたかを考察したが、特に、牧野が異文化である西洋文化を自らの養分として積極的に吸収することで、黄遵憲や夏目漱石が越えられなかった異文化の壁を乗り越え、西洋の社会で受け入れられていく姿を、牧野自身の体験談を利用して具体的に示していく手法は鮮やかである。それだけでなく、牧野の自文化と異文化の双方に対する相対的な視点を持っていたことを指摘することで、多文化共生の

メカニズムの探求に成功している。こうした研究から、本書が異文化理解のあり方を示された点には学ぶところが大きい。

また、第二部の「翻訳の『変容』」のArthur Waleyの翻訳を取り上げた研究では、イギリスの東洋学者Waleyの翻訳作品を取り上げ、彼の翻訳が持つ問題点を明らかにしているが、これはWaleyと同じく英語・中国語・日本語が分からないと不可能であり、著者の高い言語能力が発揮された研究だと言えるだろう。さらに、本書の第八章や第九章を読むと、それぞれの言語圏の文化への理解も必須であることが分かる。例えば、第九章では、日本の謡曲「谷行」と中国の『詩経』の「黄鳥」に対するWaleyの翻訳を取り上げ、それぞれの翻訳を通じて、如何にWaleyの異文化への理解や彼自身の価値観が「変容」という形で再現されているかを提示しており、大変興味深い。これも著者が言語だけでなく、日本や中国の古典文化に対する理解があるからこそであろう。

そして、著者が繰り返し言及しているように、翻訳研究において原作者と翻訳者だけでなく、その両文化に位置する読者層に対する認識を深めていくと、翻訳研究と異文化理解とがつながっており、異文化理解に対する「翻訳」の果たす役割が大きいことが読み取れる。であるならば、今少し詳細に、異文化理解における翻訳の位置づけや役割について、研究の見通しが述べられていたら、とも思う。

以上、門外漢にも関わらず、評者が感じた所を述べてきたが、本書は、比較文化研究において異文化理解や翻訳研究を行う上で必読の書となることと思われる。なお、評者の力量不足による誤読も少なくなかろう。そのような点があれば、著者ならびに読者のご海容を乞う次第である。